

俳句の先駆者・子規の滑稽

飯塚ひろし

俳句の歴史は、明治二十年代後半に始まる極めて新しいものである。

俳句の始まりは、子規が我が国に「俳句」を発生させ、俳壇を持って俳句を全国に普及せしめた事にある。

月並みに墮した俗流俳諧に、子規が新しい時代精神の光を当て、俳句を再生させたのである。子規の俳句を語るとき、誰しも「写生」を一番に挙げる。

しかし、写生句のみでなく時事句、述懐句、社会的な主題の句と多義に互っている。

何を詠むにしても、子規は対象の質感に正確に迫っている。

それが子規独特の句境を生み、写生が己の心を表現する独自の世界を作り上げた。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 子規

子規は奈良に遊んだ折に、法隆寺の茶店で好物の柿を食べた。

「柿くへば」条件反射的に「鐘が鳴るなり」とは、子規らしい把握で面白い。

碧梧桐が「柿食うて居れば鐘鳴る法隆寺」とすべきと指摘すると、子規は「そうすると少々句法が弱くなる」と答えている。

揚句は、折から鳴り出した鐘の音に、打ち興じている子規の姿が巧く表出されていて微笑ましい。子規の柿好きは、自他共に有名であった。

毎年よ彼岸の入りに寒いのは 子規

これは俳句らしくない句である。

子規の母堂が呟いた言葉がそのまま俳句になった。子規の茶目っ気と、したり顔が目
に浮かぶようで愉快である。

この句を披露して「してやったり」と得意満面な子規が子供のようでユーモラスであ
る。季節感を鋭敏に捉えたユニークな作品である。

しぐるるや蒟蒻冷えて臍の上 子規

病中二句の一つ。此の頃から子規の病状は悪化し、病床で呻吟するのが日常と化し
た。

痛みを和らげるお呪いか、温めた蒟蒻を「臍の上」に載せていた。それが冷えてきて
も、自分では取り替えも出来ない。無造作に言い放した俳辞に、子規独特のおとぼけ
趣味でユーモアとペーソスが窺える。

病臥の身上を自ら「ふざけ」てみせ「おどけ」てみせ惨めな現実を避けたのは、子規
が唾棄した「俳諧化」であったとは皮肉である。

鶏頭の十四五本もありぬべし 子規

子規庵の病室から、ちらりと庭を眺めた所見であろうが、鶏頭の一叢を即座に「十
四五本」と把握し「ありぬべし」と断定した。この大雑把な決断に拍手を贈りたい。
子規の詠みっぷりは、鶏頭の実景から心象景に移行するかの如くである。

「十四五本」と決め付けたのは、子規の感性だが余りにも大雑把で笑えてくる。

戦後、此の句の価値をめぐり有名な「鶏頭論争」があり賛否両論に分かれたが、しかし現在ではこの句を否定する人は少ない。

子規は結核から脊椎カリエスの病魔に侵され、臥せって身動きが出来ない。盛んに降る雪を障子の穴から眺めているが、積雪量が気になって仕方がない。

障子に穴を開けたのは、子規自身だろうが幼児のような所作が微笑ましくも哀れを誘う。障子に明けた穴から、外界を覗く子規の姿はユーモラスで、しかもペーソスが漂う。

子規後、俳句界の双璧の位置を碧梧桐と虚子が占めた。子規を継承した虚子は「発想の自由さ」「連想の広さ」を遺憾なく発揮し、後進の指導に尽くして子規山脈を形成した。

俳句の先達の研鑽・啓蒙の精神が受け継がれ「きら星」の如く多くの俳人を輩出して、今日の俳句の盛況をみるに至ったのである。